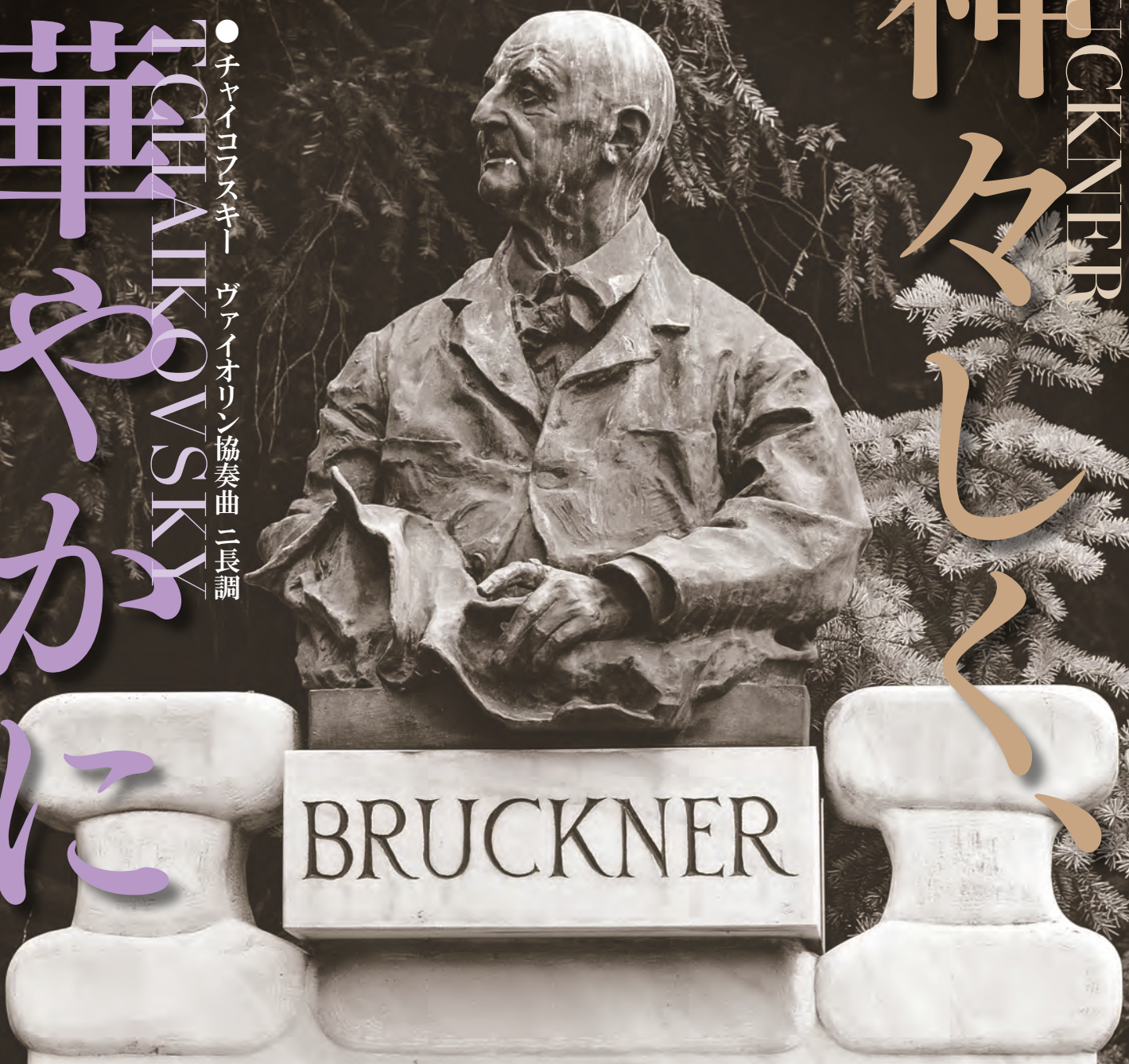
Miyamae Philharmonic Orchestra ／ The 49th Regular Concert

●ブルックナー　交響曲第7番 ホ長調
BRUCKNER
神々しく、

●チャイコフスキー　ヴァイオリン協奏曲 ニ長調
TCHAIKOVSKY
華やかに



宮前フィルハーモニー交響楽団
第49回 定期演奏会

2021 12/12［日］14:00開演（13:15開場）
多摩市民館大ホール

後援：川崎市・川崎市教育委員会「音楽のまち・かわさき」推進協議会

演　目

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー
ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 35

第１楽章　Allegro moderato - Moderato assai
第２楽章　Canzonetta:Andante
第３楽章　Allegro vivacissimo

―― 休憩 ――

アントン・ブルックナー
交響曲第７番ホ長調（ハース版）

第１楽章　Allegro moderato
第２楽章　Adagio
第３楽章　Scherzo
第４楽章　Finale

指揮：久世 武志
ヴァイオリン独奏：西本 幸弘
管弦楽：宮前フィルハーモニー交響楽団

チャイコフスキー作曲
ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品35

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840-1893）

チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲ニ長調は１８７８年に作曲されて、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの三大ヴァイオリン協奏曲に加えて「四大ヴァイオリン協奏曲」と称されます。チャイコフスキーらしい人間の心のひだを包み込み、哀愁に満ちた抒情的かつ情熱あふれでるハーモニーが相まって、心の底からの喜びを全身で味わえます。

ウィーンフィルによる初演が１８８１年12月４日※ですので、今回は記念すべき誕生１４０周年演奏会となります！

全体的な疾走感ある曲調から、バイオリンソロのカデンツァが艶やかに彩る息をつかせない名曲中の名曲。フィギュアスケート髙橋大輔さんがショートプログラムに使用していたりと皆さんの耳になじんでいるかと思います。

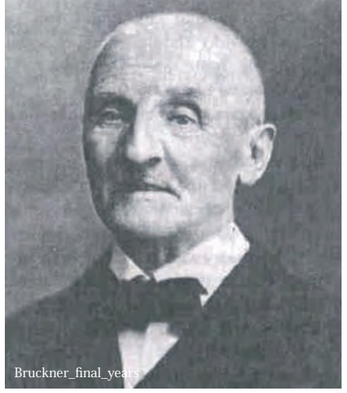
第１楽章の冒頭、１ヴァイオリンが奏でる主題は子供が「そーっと曲を覗き見て、あとずさりしてまた見に来る」と感じられるかわいらしいモチーフではじまります。ソロ・ヴァイオリンが入ると一気に駆け上がり、深く艶やかな音色から最高潮に私たちを導きます。ロマンティックな歌声をフルートとの掛け合いがあり、それを受け継いだ美しいソロ・ヴァイオリンがオーケストラを引き連れて華々しく締めくくります。

第２楽章はささやくような音色、カンツォネッタ（小さなカンツォーネ）で木管が誘い出すようにして、ソロ・ヴァイオリンが物思いにふける憂愁の色を帯びた主題を奏でていきます。木管の音色と絡みながら悲哀の色を濃くしてゆく。そこから切れ目なく第３楽章に入っていきます。

第３楽章は管弦楽による目の覚める響きで始まり、ソロ・ヴァイオリンが主題を奏でてカデンツァが地の底からの深い音を通して、疾風のごとく湧き上がってきます。そして、民俗舞曲トレパークのモチーフがリズミカルに駆け回り、オーケストラを引き連れてソロ・ヴァイオリンが疾風怒濤、華々しくたちあがる様は天に昇る感じがしてきます。

古から音楽は魂の栄養といわれていますが、思いの丈をギュッと詰め込んだ協奏曲をどうぞお楽しみください！

※１８７９年の初演という説もあります。



アントン・ブルックナー（1824-1896）

ブルックナー作曲
交響曲第7番ホ長調

ブルックナーは32歳より作曲を学び始め、作曲家としては非常に遅いスタートでした。交響曲第７番は、ブルックナーの初めての成功作です（初演時60歳）。彼の交響曲の中では比較的ゆったりとした親しみやすい曲であり、彼の代表作である教会音楽の大作「テ・デウム」と並んで生前最も数多く演奏された作品です。

本作品は、ブルックナーが大きく影響を受けたワーグナーの死を予感しながら執筆され、実際に執筆中に彼の訃報が伝えられました。ワーグナーに捧げられた第２楽章の葬送音楽は本作品最大の聴きどころです。曲中には、「神々の黄昏」や「トリスタンとイゾルデ」等のワーグナー作品に見られる旋律の引用やその変形モチーフが随所に用いられ、巨匠への敬意と賛美の念がうかがえます。また、ブルックナーの交響曲としては初めてワーグナーチューバが編成に加えられました。本楽器は、ワーグナーの作品で使用されたホルンとチューバ両方の音色を兼ね合わせた新しい楽器で、ホルン奏者が持ち替えて演奏されます。

第１楽章は、ヴァイオリンの静かな霧のようなトレモロから、チェロとホルン・ソロによる天へ上がっていくような雄大な第１主題が現れ、ブルックナー音楽の広がりの中に包み込まれます。この弦楽器のトレモロの幻想的な響きが作り出すオルガンのような響きは、ブルックナー音楽の特徴の一つです。第２主題はオーボエとクラリネットの木管楽器群から始まり、徐々に他の楽器に引き継がれていきます。終盤の、譜面上の演奏者用の練習記号「W」（＝ワーグナーの頭文字）の場面では、初めてティンパニが登場すると共に、特に深い祈りの意味を込めたメロディが奏でられます。

第２楽章のアダージョは、本交響曲のクライマックスとも言えます。ワーグナーの死を悼み、冒頭はワーグナーチューバ４本とビオラ、チェロ、コントラバスによって荘厳に始まり、ヴァイオリンに悲しくも美しいメロディーが移っていきます。第２主題は３拍子へリズムが変化し、第１楽章のテーマの音列を反行形にした旋律が進んでいきます。後半では、「テ・デウム」の最終楽句「non confundar in aeternum（わが望みはとこしえに空しからまじ）」を用いて、特別に強い想いを込めて和声的音階が壮大に発展し、ハ長調の頂点へ到達します。その後、ワーグナーチューバとチューバによる厳粛な葬送音楽が奏でられ、ブルックナー自身によって補筆された感情溢れる*fff*でクライマックスを迎えます。最後は魂の安らぎを願うような、嬰ハ長調の静かな響きで締めくくられます。

第３楽章は、前楽章の重々しい悲愴を打ち破るような、ブルックナーらしい力強く快活なスケルツォで、弦楽器のエネルギッシュな３拍子とトランペットを筆頭とした管楽器による牧歌的な舞曲のテーマが展開されていきます。その後、中間部のトリオではテンポを落として田園的な優しくゆったりと流れるような雰囲気となり、再び冒頭のスケルツォへ回帰します。

第４楽章は、第１楽章の第１主題と同じモチーフを符点のリズムで軽やかにした、ヴァイオリンの生き生きとした上昇音形で始まります。めまぐるしい転調を繰り返しながら次第に重みを増し、柔らかく穏やな第２主題とコラール風の第３主題が進められます。展開部と再現部を経て、テンポを大きく落としてコーダに入り、曲の最後に、第１楽章の第１主題に戻ってきます。最後はフィナーレにふさわしく、華やかに感動的に曲を締めくくります。

ブルックナーの楽曲は、様々なパターンを反復・変形して用いたり、和声を駆使した教会音楽のような響きを作ったり、まるで緻密な巨大建造物のように感じられます。一方、長大で退屈とも評されることもあり、音楽家の中でも好みの分かれる特異な作曲家となっています。本日は、深い悲しみと祈りから生み出されたこの曲を通じて私たちが感じた、ブルックナーの祈りの音楽の魅力をお伝えできたらと思います。

Profile

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。英国王立北音楽院首席栄誉付ディプロマ取得。英国・豪州両国国営放送に出演。各種施設の訪問演奏やアウトリーチ活動に精力的に取り組んでいる。2014年より東日本大震災復興支援音楽プロジェクトをあわせた、10年リサイタルシリーズを始め、ライブ録音CDも今までに3枚リリース。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団・九州交響楽団、両楽団コンサートマスターを兼任。ふもとのこどもオーケストラ音楽監督、NPO法人Mt.Fuji交響楽団特別顧問、クラシカルクロスオーバーユニット《Rain Cats & Dogs》主宰。

Interview

ヴァイオリニスト

西本幸弘さん

西本さんと宮前フィルとの出会いは2007年。第26回定期演奏会で共演させていただいた大谷康子さんのお弟子さんとして練習にお越しいただき、JAクラシックコンサートでは、西本さんにサンサーンスのヴァイオリン協奏曲第3番を弾いていただきました。あれから14年。今回の初合わせの練習後にお話を伺いました。

―14年ぶりの顔合わせはいかがでしたか。

当時は学生で、経験の少ない私を皆さんが暖かく迎えてくださいました。今日は皆さんが、14年経った私に興味を持ってくださっているのを感じ、いい緊張感がありました。また、演奏では自分自身の変化を感じ、皆さんも当時から変化してきたのだろうなと、「時間」を感じたリハーサルでした。

私も現在、オーケストラで弾いていますが、コンチェルトはオーケストラとのコミュニケーションが大事です。たとえば国際コンクールでコンチェルトを弾く若い方を見ていると、オーケストラを味方にできるソリストはいい成績を出しますし、我々も弾いていて楽しい。だから、今回ソリストとして私は、皆さんが何を感じて、どういう方向に行きたいか、吸収したいと思っています。たとえば、皆さんの中に私の人生の先輩は多くいらして、私の知らない音や色を知っている。皆さんの経験から出た音を私が"食べる"というか(笑)、吸収して、その上で私の音としてどうつくろうか、と考えます。コンサートマスターの性分かもしれませんね。

―今回のコンチェルトは西本さんにとってどのような曲ですか。

思い入れという言葉では足りないくらい大事な曲で、ヴァイオリニストを目指すきっかけになった曲でもあります。音楽の道を目指そうと決めたとき、このコンチェルトをオーケストラと弾けるまでヴァイオリンを辞めないぞと覚悟を決めた曲なのです。でも実は、ソロのフレーズより、オーケストラで弾く方が好きな曲(笑)。そう思えるほど、ソリストとオーケストラが一体となるので、いかにドラマチックなストーリーを一緒に作るか、と考え、演奏しています。

―お客様にはどのように楽しんでいただきたいですか。

この曲に限らず、コンサートってどのように聴いたらいいですか、とご質問いただくことが多いのですが、私はいつも、「心の中に真っ白いキャンバスを持ってきてください」と話します。自分が聴いた音や刺激を色に変えて、自由に感じたままにキャンバスに色を乗せるのです。それぞれのお客さまが感じたストーリーを、絵として持ち帰っていただいたらうれしいです。子どもたちとのワークショップで実際にキャンバスに絵を描いてもらったりしていますが、出来上がった絵が予想外のものだと、私も刺激されて演奏が変わる。芸術と心のローテーションがあるのです。ちなみに、華やかな絵が多く、こういう風に聴こえているのかと、私自身チェアアップされますね(笑)。

―仙台フィルのコンマスに就任されたのは2012年。震災直後で、責任の大きい仕事ではなかったでしょうか。

被災地のオーケストラだということは大きく感じていましたが、仙台フィルというチームの中、私一人が何かを大きく変えられるわけではないので、仙台フィルの皆さんには、「みんながハッピーになるコンサートをできるオーケストラを目指すためのコンマスになります」とお伝えしました。コンサートを作る人、演じる人、聴いてくれる人が三位一体になる空気を共有できるコンサートをつくり、結びつきを掴めたら、きっと輪が広がる。きっと皆さんの心が柔らかくなって、ひいては復興につながるのではと私なりに信じ、今日までやってきました。

西本 幸弘

Yukihiro Nishimoto

―九州交響楽団と2つのオーケストラでコンマスを兼任する西本さんが思う、コンマスの役割とは。そして2つの地域で日々どのようなことを感じていますか。

一番はコンマスとして、架け橋になりたいですね。それぞれの伝統を活かしつつ、それぞれのいいところを取り入れる。若いがゆえにできる"かき混ぜ方"があると考え、とにかく動きながら日々忙しく取り組んできました。休息も大事だと学んではきたものの、私休みがあると逆に体調崩すんですよね(笑)。

2つのオーケストラは、両極端と言っていいほどキャラクターが違うので、私自身の引き出しも増え、有難いと感じています。また、両極端なのはお客さまも同様で、現在それぞれの土地に家を借りて住み、時間を過ごしていますが、仙台と九州は、お客さまの音楽の味わい方が違うと感じます。仙台のお客さまは、じっくり火がつき、じりじり盛り上がってきて、一回爆発するととても熱い。一方、九州のお客さまは最初から割と距離が近い。居酒屋に行くとよく分かりますね。カウンターで飲んでいると、隣で飲んだらお友達、という感覚は九州なんですよね。でも仙台では、隣で飲んでいて、程よい距離感があり、顔なじみになるとだんだん仲良くなる。どちらの距離感も好きですし、私は両方の美味しいところを味わっていると思うんですよね。

就任当初は最年少のコンマスでしたが、ようやく今30代後半。10年が経とうとしていますが、あっという間です。今この歳になって、これまで吸収してきたものを出していけるようになってきたかな。

―ここからの10年はどのような活動を描いていますか。

「自分に正直に」を、今までもこれからも一番大事にしたいです。コンマスになり、迷うことも多くありましたが、だからこそ覚悟も持ちました。自分のやりたいことをやる。自分に素直に向き合う。うまくいかなかったら反省すればいいし、次に向けて考えればいい。

音楽だけではなく、一人の人間として大事にしているのは、rebornの精神です。毎日、生まれ変わったつもりで朝起きたい。その日あったことはその日のうちに考えて、自分なりの答えを見つけて寝る。次の日の朝になったら生まれ変わったつもりで一日過ごす。そういうスタンスで生きていますし、これからの10年も大事にしたいと思います。

また、ソロ活動では、discoveryというテーマがあります。頑張ってこられたのは、毎日に小さな発見があったからだと思うのです。何か発見すると興味が湧き、次の一歩に進むことができました。その日のことはその日に答えを見つけ、翌朝にはrebornしてまた何かに興味を持つ。全部が刺激で、まるで赤ちゃんですよね(笑)。生まれたての赤ちゃんのような気持ちで毎朝を迎えたいし、私がヴァイオリニストとしていられる一番の原動力だと思います。

―コロナ禍は、音楽家としての西本さんにどのような影響を与えたでしょうか。

一人の人間としては、ステイホームはショッキングな時間でした。ですが、音楽に関してはポジティブに捉えています。たとえば演奏中のソーシャルディスタンスによって、普段使っていなかった耳の一部が開いて、離れたからこそ聞こえてきた音があったのです。人間って進化したい生き物なんだなと思いましたね。人間としてはしんどかったけど、音楽家としては、くよくよしている暇はない。将来もし、また困難にぶつかったときに、僕らはこうやって乗り越えたよと、次の世代にヒントを残せたらいいと思うし、ここから何かを見つけ、術を探してつなげるのが伝統を残していく者の役割。クラシック音楽をなくすものかという想いが、私をポジティブにさせるのかもしれません。

また、ベートーヴェンの時代は感染症もフランス革命もあり、多くの犠牲もありましたが、それまで貴族のものだったクラシック音楽が、庶民も楽しめるようになった。ある種のビッグバンですよね。これがなければ僕らも音楽をできていなかったかもしれない。そして今も、ビッグバンの時期なんだと思うのです。そうだと信じて、何とかこじ開ける方法をみんなで探したいと思っています。

―最後に、メッセージをお願いします。

私が思う音楽の力とは、人の心を柔らかくすることだと思うのです。ショッキングなことがあると、人間の心って固まってしまう。うれしくても喜べない、悲しくても悲しめない。それを音楽で柔らかくすると、喜怒哀楽の表現ができるようになる。震災後、音楽を聴いて初めて涙を出すことができたという方も多くいらしたのです。

喜ばせるだけではなく、悲しいときはちゃんと悲しめる。音楽にはその力があると思うので、今回、宮前フィルと私のタッグで、心が柔らかくなる人が増えたら、心を朗らかにしてもらえるようなコンサートを、お客さまとも一緒に作れたらいいなと思います。

お宝写真!!

初共演07年。あれから14年のBEFORE&AFTER!?
昔も今も、気さくなお人柄にみんなメロメロ。
ちなみにインタビュー中、07年のお写真をお見せしたら、ご自身の写真を見て第一声、「若ッ!」。
写真を撮ってツイートされてました。
気になる方はTwitterをチェック!
(@yukihironishimo)

Profile

洗足学園音楽大学指揮研究所修了。これまでに数多くのオペラ・カンパニーで指揮し、音楽スタッフも務めている。また2015年より洗足学園音楽大学で後進の指導にもあたっている。2011・2012年にはフランス・アングレームで開催されたコミクストゥス音楽祭に招待されトゥール歌劇場、オルケストル・エクトル・ベルリオーズの本公演とツアーに客演し、すべての公演を成功に導き、新聞各紙で高い評価を得た。2017年にはオーストリア・アイゼンシュタットにあるエステルハージ宮殿内のハイドンザールでハイドンのミサ曲とオペラ「月の世界」の公演を行い絶賛される。また2018年にはチェコ・プラハで行われたプラハ・クラシックス音楽祭に招待され、チェコフィルやプラハ放送響のメンバーらと共演。今後、イタリア・トスカーナ州で行われるオルベテッロ・ピアノ・フェスティバルに招聘されている。

Interview

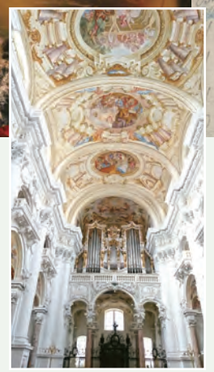
指揮者
久世武志さん

ブルックナーの人柄を表すエピソードについて、久世先生は「彼は河原で小石の数をずっと数えていた」というエピソードを紹介してくださいました。一つのことに凝りだしたら止まらない、心酔したら一直線。少し不器用なブルックナーがワーグナーに心酔していることを意外に感じていました。二人の作曲家の物語、そしてブルックナーの魅力を久世先生に伺いました。

—練習を重ねるたびに先生のブルックナーへの強い思い入れを感じますが、これまでの先生とブルックナーとの関わりはどのようなものだったのでしょうか？

7番はブルックナーの中でも一番好きな曲。初めて聞いたのはレコードで、中学生の時でした。オーストリアのリンツにある聖フローリアン教会がジャケットのレコードでした。朝比奈隆氏が指揮する大阪フィルの演奏で、大フィル初のヨーロッパ公演。教会で演奏したライブ録音をレコードで聴きました。

朝比奈先生のエッセイでこの時の演奏について読んでおり、それまでブルックナーに興味はなかったのですが、そのエピソードに惹かれ、レコードを手に取りました。ジャケットの帯には「奇跡が起こった」「神のいたずらか」というような言葉が書かれていました。この演奏はこの後語り継がれる演奏となるのですが、2楽章が終わった後に遠くの教会で16時を告げる鐘が鳴るんです。ちょうどいいタイミングに、たまたま。鐘の音も収録されています。鳴り終わるのを待って、朝比奈さんは3楽章を振り始めたという伝説と言える演奏です。聴いてみて、感激して、演奏後の20分近い長い拍手も強烈に印象に残っています。



聖フローリアン修道院
（写真提供：久世先生）

聖フローリアン修道院にあるオルガンはブルックナーがオルガニストを務めていた時に弾いており「ブルックナー・オルガン」と呼ばれる。1873年にはブルックナーの提案により楽器の再建が行われており、足の鍵盤はブルックナーの足に合わせて作ったとも言われる。ブルックナーの死後、彼の遺言通り、遺体はこのオルガンの真下に安置された。（写真提供：久世先生）

—なぜ7番にはこれほどワーグナーへの想いが溢れているのでしょうか。

リヒャルト・ワーグナー

彼らは真逆の人生を送っていたのですが、お互いを尊敬し、強い絆があったのです。ブルックナーは、教員の資格を得て修道院の先生になり、オルガニストになり、その後リンツに出て、市内中の教会のオルガニストになり、その後ウィーンの大学の教授になり、と少しずつ着実に成功をおさめ、人生の階段を上がっていった人でした。片やワーグナーは、指揮者としてヨーロッパ中を駆け回り、政治活動で追われる身になり、パトロンの世話になりながら、その奥さんといい仲になり、のちに結婚するのですが、とにかく派手な人生を送っていました。

ブルックナーはワーグナーを尊敬しており、交響曲2番と3番を献呈しようとバイロイトに会いに行ったのです。ワーグナーは3番を大変気に入り、「ベートーヴェン以降の素晴らしい交響曲の作曲家を俺は一人知っている。それはブルックナーだ！」と彼は言ったという逸話が残っています。ワーグナーはとても出世欲のある人で、寄ってくる人に対しては値踏みするような目を注いでいましたが、訪ねてきたブルックナーは朴訥で、田舎の農民の延長みたいな人だった。自分の出世に何の役にも立たなそうなブルックナーを彼が認めたのは、よほどワーグナーは「この作曲家は本物だ」と感じたのでしょう。3番の献呈を受け、お互いがお互いを尊敬していたのです。二人は、ワーグナーが亡くなるまでバイロイトで何度か会っていたようです。ワーグナーを訪ねてくる人は多くいましたが、ブルックナーが来たときは断らずに会っていたといいます。二人は宗教観も全く違ったのですが、それを越えて、尊敬しあっていたのです。

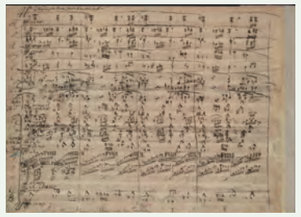
最後に二人が会ったのは交響曲6番の作曲後、7番を作る直前でした。ワーグナーはブルックナーに「あなたのシンフォニーを全部演奏したい」と言ったといいます。それほどに、絆が深まっていたのです。そのワーグナーが瀕死の状態にいると聞き、7番を書き始めて想いを込めていったのでしょう。1楽章の練習番号「W」で、曲中で初めてティンパニが登場します。なぜここまでティンパニが出てこないのだろうと不思議に思っていましたが、それは、「キリストが絶命した瞬間、地震が起こった」という新約聖書の描写をワーグナーの死に重ね合わせていたのではないかという解釈を読みました。練習番号「W＝ワーグナー」にティンパニが出てくる意味がそこにあるのではないかと。そう解釈すると、「W」までの過程は、キリストが受難を受けているさまになるのです。直前の半音階進行で絶命し、Wで地震が起こり、そこでチェロによってワーグナーのオペラのモチーフが引用されるのです。

ブルックナーの生家は、オーストリアのリンツから15㎞くらい離れた小さな田舎町アンスフェルデンにある。丘の上にあり、すぐ後ろには教会がある。（写真提供：久世先生）

ブルックナーの像。後ろには聖フローリアン修道院が見える。（写真提供：久世先生）

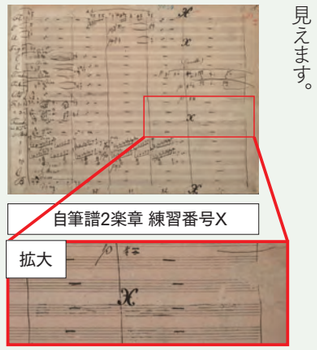
リンツの街並。カフェ・ブルックナーの並びにリンツでのブルックナーの常宿が今でも営業している。（写真提供：久世先生）

ブルックナーの眠る聖フローリアン修道院のあるザンクト・フローリアンの街並。（写真提供：久世先生）



自筆譜2楽章 練習番号W

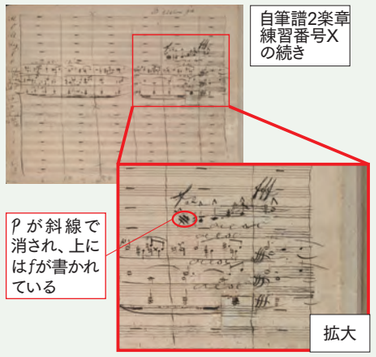
また、2楽章の練習番号「X」からは、もともとトランペットとトロンボーンのために書いていた譜面を、書き直してワーグナーチューバに吹かせています。ワーグナーのために作られた楽器を使いたかったのでしょう。多く書き直されたように見えます。



自筆譜2楽章 練習番号X

拡大

そして、そのあとホルンが入りますが、ダイナミクスは *p* から *f* と書かれていたものが消されて、*f* から *fff* に書き直されています。ここはホルンが絶叫する場面。ワーグナーの死の知らせを知って、この書き直しがされたと言われています。相当心が乱れていて、*f* の字の濃さに、彼にこみ上げてきたものを感じます。



自筆譜2楽章 練習番号Xの続き

p が斜線で消され、上には *f* が書かれている

拡大

【ワーグナーチューバ】
名前の通り、ワーグナーのために作られた楽器。「ニーベルングの指環」作曲にあたり、新たな音色を探求していたワーグナーによるホルンとチューバの中間に位置する音色として作られた。

また、ブルックナーがそこに込めたであろう想い、ワーグナーへの想いを知ると、より曲に入り込めると思います。

—今回、宮前フィルとはどのようなブルックナーを演奏をしたいと思われますか？

音の響き、ハーモニーを大事にしたいですね。楽譜に細かい指示がないので、ブルックナーの曲づくりは手探りで、指揮者の裁量による部分も多いのですが、最後はみんなが幸せな気持ちで終われるような演奏ができたら良いですね。

こういう時代にあって、音楽を演奏すること、この曲を演奏することがどういう意味を持つのかと考えます。コロナ禍になり、一時は音楽が要らないもののように言われていましたよね。それは辛かったですし、それ以上に宮前フィルと一緒に二つの本番をするはずだったのが、演奏会が中止になり、皆さんとも会えなくなった。それがもっと辛かったですね。今回は曲の持っている※試練の音型を皆で追体験しながら、最後には希望の持てる世界に到達したい。最後はハッピーな演奏会で終わりたいです。

聖フローリアン修道院入口すぐの床には、ブルックナーのお墓がこの地下にあることを示すプレートがある。（写真提供：久世先生）

※複付点8分音符と32分音符の音型は、音楽修辞学では試練を表現しているとされる。曲中にたびたび出てくる。なんと試練の多いこと…

これからの演奏会

ポピュラーコンサート2022

日時：2022年2月6日（日）
場所：宮前市民館大ホール
指揮：田中 健

第50回定期演奏会

日時：2022年7月3日（日）
場所：宮前市民館大ホール
指揮：田中 健
曲目：モーツァルト　歌劇「劇場支配人」序曲
メンデルスゾーン　交響曲第5番「宗教改革」
ドヴォルザーク　交響曲第6番

団員募集

宮前フィルでは現在、以下のパートで仲間を募集しています。
ぜひ一度、見学に来てみませんか。

ヴァイオリン 4名：基本スキルを備えたオーケストラ経験者

ヴィオラ 大募集：3rdポジションなどの基本スキルを備えた合奏経験者

チェロ 若干名：オーケストラ経験者

コントラバス 若干名：合奏経験者 楽器貸し出し可

トランペット 1名：オーケストラ経験者

毎週日曜 朝 9:00～12:00、川崎市内で練習しています。募集の詳細や見学の申し込み、お問合せはホームページのメールフォームよりご連絡ください。

宮前フィルホームページ：https://miyamae-phil.jimdo.com/

演奏会アンケートのお願い

今後の演奏活動の参考にさせていただきますので、お手数ですが本日の演奏会についてお客様のご意見、ご感想をお聞かせください。

右のQRコードから
ご回答お願い致します。

宮前フィルハーモニー交響楽団

制作・印刷　八幡印刷株式会社